
ロスト・チルドレン

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・チルドレン

【Nコード】

N1427Y

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

不倫中のOL美由紀は、偶然、初めて付き合った彼氏の準一に再会する。

8年振りに会った彼は、義父から受けた虐待の為に声が出なくなっていた。

夢も希望もないOLの美由紀と、トラウマを抱えた工場派遣社員の準一。

社会の底辺で彷徨っていた二人は再び歩き出そうとするのだが・・・？

再会 1

クリスマスも近い11月の半ば。
事務所の壁時計の針が5時半を指したその瞬間、あたしはデスクから勢い良く立ち上がった。

「お先に失礼しますっ！」

これから残業モードに入ろうと、のんびり席を立ってコーヒーを入れ始めた同僚達を尻目に、あたしはそう言い放ってデスクの中からバッグを掴んで引っ張り出す。

零細企業の給料計算が仕事というしがないOLのあたしが、たった一時間残業したところで会社の利益に繋がることはない。
寧ろ、無駄な経費だ。

明日できることは今日しないのが、あたしのライフスタイルだった。
しかも、今日は待ちに待った金曜の夜。
あたしには大切な約束がある。

「美由紀^{みゆき}、やけに急いでんじゃん？何かいいことあるわけ？」

隣のデスクでパソコンと睨めっこしていた同僚、田中裕美^{たなかゆみ}がチラリと目だけ動かしてあたしを見た。
彼女の鋭い視線に、あたしはドキっとするも平静を装って笑顔を作った。

「何にもありませんよーだ。期待してもムダだよ。男でもできたらユミにも紹介するって。」

「じゃ、何で週末の仕事上がりに急いでんの？」

ニヤリと笑いながら意地悪く突っ込んでくるユミを、あたしは軽くあしらう。

「できる女は残業しないんだよ。あたしは会社が嫌いなの。じゃ、また月曜日にね。」

まだ訝しげにあたしの背中を見つめるユミの視線を無視して、あたしはオフィスを飛び出した。

この会社に入社して早5年。

地元の商業高校卒業と同時に入社した地元零細企業は、毎月同じことの繰り返しで、もう既に飽き飽きしている。

給料計算という仕事は、時々社員の入れ替わりがある他は決まった事を締め日までに行えばそれで事足りた。

会社が高卒の若い女の子に大した責任を負わせる筈もなかったが、あたしも仕事に情熱など感じた事などない。

ただ生活の為に割り切って、業務を淡々とこなす毎日だ。

23才にして人生に夢も希望もないあたしが、死ぬほど心待ちにしていることが一つだけあった。

それが毎週一回だけ訪れる金曜の夜。

まさに今夜だ。

チョコレートブラウンの小さな軽自動車に乗り込み、あたしは会社の駐車場を飛び出した。

まだ6時前だというのに日は完全に落ちて、街灯があちこちにつき

始める。

晩秋の風が肌身に染みて、人肌恋しい季節の到来を感じる。
薄暗い夕闇の中、あたしは今夜の逢瀬に思いを馳せる。

そうだ、お酒とつまみでも買っていこう。

アイスクリームと甘いチョコレートも。

お腹が減った時のために冷凍のピザでも用意しよっかな。

明日の朝食べるクロワッサンとコーヒーも・・・。

遠足の用意をする子供みたいに、あたしの胸は楽しみで高鳴っている。

今夜の事は楽しみだけど、こんな風に考えながら買い物したりするのも、あたしは好きだった。

遠足当日より前日までの方が楽しいのと同じ心境だ。

大好きな人の為に何かを用意するって、こんなに幸せなことなんだ。あたしは道路沿いにスーパーを発見すると、車をそこに滑り込ませた。

仕事帰りの主婦達で混み合うスーパーの駐車場をしばらくウロウロした後、やっと見つけた軽専用の一角に車をバックで入れた。

何とか入ったものの、真っ直ぐになっていないので運転席のドアが隣に車に接触しそうで開かない。

運転が下手な私には日常茶飯事のことなので、助手席側から降りようとお尻をずらした。

その時。

とんでもない光景があたしの目の前に繰り広げられた。

車の前をゆっくりと通り過ぎていく子供連れの夫婦。

赤ちゃんを抱いた上品な若奥様が5歳くらいの男の子の手を引いて

いる。

それに寄り添うように歩いていく買い物袋を一杯抱えたハンサムな男性。

甘いマスクが美しい妻を見つめて、柔らかな微笑みを浮かべている。よくある微笑ましい風景だ。

ある一点を除いては。

私は車の中で硬直したまま、目の前を通り過ぎていく夫婦をバカみたいに見送った。

そのハンサムな旦那こそ、あたしが今夜遭うことになっていた筈の男性だったのだ。

再会 2

件名 予定変更

本文 ゴメン、今日会えない。嫁が突然子供と一緒に帰ってきた。また連絡する。

彼からこんなメールが来たのは、約束の時間もとくに過ぎた夜9時頃だった。

行く当てがなくなったあたしは、駅前のコイン駐車場に車を止めたまま、ボンヤリと彼からの連絡が来るのを待っていたのだ。

今頃返信してくるとは、あたしと会うことなんて完全に忘れていたらしい。

直接マンションに行つて、嫁と鉢合わせしたらどーするつもりだったんだか。

幸か不幸か、あたしはその前に地雷を踏んで勝手に自爆した。神様の計らいと感謝すべきなんだろうか。

文句を言える立場でないのは分かつてる。

おバカなあたしでも、身の程はわかまえてるつもりだ。

世に言う不倫の関係で、妻の妊娠中の里帰りに隙について幸せな家庭にヒビを入れてるのはあたしなんだ。

彼の家庭を壊すつもりもないし、奥さんに何の恨みがあるわけでもない。

むしろ謝りたいくらいだ。

でも、だからと言ってこの関係を止める勇気はあたしにはなかった。

一つは彼が好き。

イケメンで優しく、セックスの相性もバツグンで、何と言ってもお金を持っている。

彼は大手商社の営業マンで、今まで付き合った男でこんなに金払いがいいのは初めてだった。

この不景気の時代、本物の恋人に割り勘させる男が主流だったのに、さすが年上の貫禄だ。

彼の車でお姫様みたいに連れ回されて、ラブホじゃないホテルにエスコートして貰うのは私の至福の時だった。

もう一つは、彼の他にあたしには頼るものがないこと。

夢も希望も将来もない、しがないOLが唯一心の支えにしているのは彼と会える金曜の夜だけだった。

それを奪われたら、あたしに何が残るだろう。
もはや生きてる意味さえ無くなるような気がした。

・・・いいじゃん。

奥さんは彼と子供と安定した将来が約束されてんだから。
週一回くらい貸してくれてもいいじゃん。

ちゃんと返すから、夢くらい見せてくれてもいいじゃない・・・。

気が付いたらポロポロと涙が零れ落ちていた。

泣いたのなんて久し振りだ。
クールで現実主義のあたしにも、こんな感情が残ってたのは自分でも驚きだった。

あたしはティッシュを掴み取り、ズズッと鼻をかんでから、ハンド
ルに引っ掛けてあるゴミ袋に押し込む。

ああもう！

どうつけてくれるのよ、この落とし前！

ブツクサ毒を吐きながら勢い良くドアを開けると、あたしは夜の街に向かつて歩き始めた。

晩秋と言うより、もはや冬に近い寒さだった。

しけた田舎の駅前には軒並み店仕舞いしていて、木枯らしでシャッターがガタガタ音を立てているのが尚、物悲しい。

この自称繁華街で唯一賑わっている場所が、ロータリーの反対側に位置するマクドナルドだ。

家に帰っても、外泊の予定だったあたしに晩御飯は用意されていない。

無意識に足が向かったのは、人恋しさか、空腹ゆえか……。とにかく、あたしは明かりを目指す蛾の如く、ノロノロとマクドナルドに向かつて歩いていった。

「フィレオフィッシュセット、ドリンクはホットコーヒーで。」

横柄な態度で注文したあたしに、カウンターの店員は笑顔すら見せて素早くトレイを用意し始めた。

さすがスマイル0円だ。

高校生だろうか。

ショートカットの爽やかな女の子だった。

すっぴんの肌がピンク色でツヤツヤしている。

たった5年前まではあたしだって高校生だったのに、どうして今、こんなにどん底なんだろう。

どこで間違って、こんな女の子になっちゃったんだろう。

溜息をついた時、後ろに人がいるのに気が付いて、あたしは慌てて場所を譲った。

レジの横で待つのはマクドナルドの常識だ。

後ろの人は待っていたかのように、スっと前に出る。

大柄な男性だ。

モスグリーンの上下揃いの汚れた作業着から、鼻にツンとくる車のオイルの匂いがした。

伸ばしっ放しの黒髪は、何年も彼女がいない事を物語っているようだ。

典型的な日本のブルーカラーの样相に、ハイソな生活を夢見るあたしには何の興味も湧かなかった。

それなのにあたしが思わず彼を見つめてしまったのは、彼と店員とのやり取りが異様だったからだ。

彼は黙ったまま、カウンターに置いてあるメニューを指差して店員に見せた。

さっきのショートカットの高校生は、キョトンとした顔で首を傾げる。

男性は訴えるような、悲しげな表情で、メニューを指さしたまま店員を見つめた。

「あ、テリヤキバーガー？セットでいいですか？」

ようやく理解してくれた店員に、彼はホッとした顔で首を縦に振った。

だが、次の難関が彼を待っていた。

「お持ち帰りですか？こちらでお召し上がりですか？」

相変わらず黙ったまま、彼は指で床を指した。

ここで食べたいということか。

聞こえている筈なのに絶対に喋ろうとしない彼のジェスチャーが面白くて、あたしは横で二人のやり取りを凝視していた。

あたしの視線に気が付いたのか、突然、その彼がこちらをクルリと振り返った。

その顔を正面から見て、あたしも絶句する。

「ホンダ君・・・だよな？」

目の前に立っている作業着の男性もあたしを見て、目を大きく見開いた。

あたしの記憶に間違いがなければ、彼は本田準一。

中学生の時、あたしが初めて付き合った、初めての男の子だった。

出会い 1

彼・・・本田準一はあたしの初めての彼氏だった。

人生のどん底にいた中学時代に、あたし達は出会った。

中学3年生になった最初の日から、あたしの不幸は始まった。いや、再発したと言うべきか。

始業式でクラス替えの掲示板を見たあたしは青褪めた。

小学校の時、あたしを苛めていた女子集団が、あの頃とほぼ同じメンバーで同じクラスになってしまったからだ。

人並みよりはかわいいと言われる顔立ちで、運動もあまり得意でなかったあたしには、小学校から女子生徒の標的にされやすかった。あたしが男子生徒と話しをするだけで「男好き」と陰口を叩かれ、下校時には下駄箱から靴が消えていた。

今思えば、つまらない非モテ女どものやつかみだったんだけど、まだ今ほど度胸も座ってなかったあの頃のあたしにイジメは辛いものだった。

そして、小学校の時の苛めより、知恵もついてきた中学校になってからの方が、陰湿さは確実にグレードアップしていた。

今まで運良くクラスが離れていたのが、今年になって同窓会の如く小学校の苛めっ子集団が集まってしまったのだ。

当然のように、小学校の時の悪夢はまた繰り返された。

靴がなくなったり、机に落書きされるのはまだいい方だった。

体育の着替えに教室に戻った時、制服が無くなっていて、それが男子トイレの便器の中から発見された時、あたしは学校に行くのを辞めた。

それが6月だったのが、7月になり、夏休みも終わった時、あたしは登校するのを余儀なくされた。これ以上不登校が続いたらと心配する親から、煩くせつつかれ始めたからだ。

周りはすでに受験モードに入っている9月の初日にあたしは徐々に登校するハメになった。

一限は始業式、二限は夏休みの宿題の提出と今後の進路指導についての話で終わった。

三限は問題児のみ残されての担任との個人面談で、不登校で出席日数も足りないあたしは当然、メンバーに入っていた。

担任に呼ばれるまでの待機中、トイレに行った時に事件は起った。

用を済ませて個室のドアを開けると、待ち構えていた6人くらいの女子に取り囲まれた。

人が用を足している間中待ってたんだから、敵もいい根性している。呆然と立ち竦んだあたしに6人の手が絡みつき、あつという間に掃除道具が入っている個室に押し込められた。

この個室のドアだけは押さないと開かないのだ。

脱出しようとあたしは体当たりしたが、6人の力で塞がれているドアはビクともしない。

ドアの外からケタケタと笑う声が聞こえてくる。

その途端、ドアの上から水の入ったプラスチックのバケツが投下された。

水の中にはご丁寧に使用済みの雑巾が仕込まれていて、あたしは頭から汚水を浴びるハメになった。

どうしてこんな目に遭ってまで、学校に来る必要があるのか。

悔し涙で視界がボンヤリしてきたその矢先、ドアの外で大声が響いた。

「おい、そこにいるの誰だよ？」

まだ変声期前の、凜とした少年の声だ。

クラスに馴染んでないあたしには、初めて聞く声だった。

ドアの前を取り囲む女子達が気まずそうにブツブツ言うのが聞こえた。

「・・・ボンビー本田じゃん。あんたに関係ないし。どっか行つてよ！」

「あるよ。その中にいるの林だろ？先生に連れて来るように言われた。出せよ。」

「あんたに言われる筋合いはないって言ってるのよ、ボンビーマンのくせに！」

「うるせえな！俺が貧乏なのが、てめえに迷惑かけたか！？自分だつて扶養家族の分際で偉そうに言ってるじゃねえよ！」

ドアの外で『ボンビー本田』なる男子とあたしを閉じ込めている女子との間でバトルが始まった。

その男子に覚えは全くなかったが、話の流れから同じクラスの居残りグループらしいことは想像がついた。

その内、ドン！とドアに何かがぶつかる衝撃音が響いた。

主犯格の女子がヒイッと恐怖の悲鳴を上げたのがドア越しに伝わる。

「出せつつつてんだよ！マジで犯すぞ、この腐れブス集団が・・・」

やけにドスの効いた暴言が、ドアの向こうから響いてくる。

女子からの返事はなかった。

やがてバタバタと廊下を走って去っていく足音がドア越しに響いて、ボンビー本田が女子を撃退してくれたことが分かった。

「・・・大丈夫？」

外から開かれたドアの前にいたのは、あたしとさほど大きさの変わらない痩せた少年だった。

出会い 2

ドアの外から『ボンビー本田』少年は優しい笑みを見せた。その笑顔は女の子みたいで、この人がさっきのドスの効いた声の持ち主とは思えなかった。

中学三年の男子にしては線が細く、顔色も青白い。

黒い髪はボサボサで、散髪している気配は見られなかった。

優しくそうな少し下がった目尻が子供っぽさを増長させている。

本来、真っ白い筈の開襟シャツは黄ばんであちこち擦り切れている。その半袖から伸びた細い腕は女の子みたいに青っちょろい。

・・・本当に貧乏なんだろうか・・・？

申し訳ないが、彼の第一印象は「栄養不良児」だった。

「・・・女子ってすげえ事するな。制服汚れてるけど、どうする？保健室行く？」

彼は汚水でズブ濡れのあたしを、頭からつま先まで見て呆れた声を出した。

彼にとつても、あたしの第一印象は「濡れ鼠」だっただろう。

個室のモップや箒に挟まれて泣きながら出てきたあたしに、彼は手を差し伸べた。

初めて優しくされて、あたしは更に泣いてしまう。

「・・・保健室行こうか？付き合っよ。」

結局、その日、あたしは個人面談をキャンセルして帰宅する事になった。

雑巾臭い濡れた制服と、久し振りの登校で起った事件のショックで面接どころではなくなつたからだ。

あたしの不登校の理由が明るみになって、保護者からクレームが来るのを恐れた担任は、今後は対策をするとしつこく言っていたが、もうどうでも良かった。

『ボンビー本田』少年は、家まで黙って付き添ってくれた。

さっきの罵声は無理して出したようで、元来、大人しくて無口な少年だった事はすぐに分かった。

「・・・あの、同じクラスですか？名前は？」

9月の日差しを避けようと公園の木陰を歩きながら、あたしは初めて彼に話しかけた。

まさか、恩人に対して「ボンビーさん」とは呼べないだろう。

でも、学校に行つてなかつたあたしは、彼の名前どころか存在すら知らなかつた。

「同じクラスらしいよ。俺も7月になって初めて登校したから、今日が初対面。本名は本田^{ほんだじゅんいち}準一。なんか、ボンビーで定着してるけどね・・・。」

クスクス笑いながら、本田君は言った。

笑うとこじやないだろうに。

「どうして学校に来てなかつたの？」

「ウチ、母子家庭で母親が別れた男からDV受けててさ。母親が逃

げてる間、しばらく児童保護施設に入れられてた。男もいなくなつたから戻ってきたんだけど、今、生活保護受けててマジ貧乏。」

全然笑えない事を本田君はサラリと言って退ける。

聞いたあたしのほうが、どこに突っ込んでいいのか分からない。ただ、彼があたしなんかよりずっと大人で強い人だって事だけ分かった。

「林さん、明日から学校来るよね？」

彼は無邪気な顔であたしに笑いかけた。

女の子みたいな優しい顔に、薄茶色の瞳が綺麗だ。あたしは急にドキドキして、頷いた。

「・・・本田君も行くよね？」

「母親がこのまま落ち着いてくれたらね。卒業まで一緒に行こう？」

その後、家に着くまでの20分程、あたし達は手を繋いで歩いた。骨ばった冷たい手は力強くて、あたしは引つ張ってくれる優しい本田君が好きになった。

とても自然の事のように、あたし達はその日から付き合い出した。

中学3年生だったあたし達が付き合うと言っても、一緒に登下校したり、放課後、図書館で受験勉強したりするくらいだった。

本田君に反撃された上、先生にも内申点を盾に釘を刺されたイジメっ子集団は、パツタリあたしを弄るのを止めた。

時期的にも受験勉強モードになっていて、皆、イジメをやるほど余裕がなくなっていたのも大きな理由だ。

やっとあたしに穏やかな学生ライフが戻ってきた。

イジメっ子ばかりでなく、あたしも当然、受験戦争に巻き込まれていった。

あたしの頭では大学進学が目的の普通科進学校に行くのは到底無理で、最初から合格圏内の商業高校を受験するつもりだった。

学校に来てなかった割には意外にも頭が良かった本田君は、普通科に進学希望を出していた。

「・・・学校離れちゃうね。」

「大丈夫。美由紀の事、ずっと好きだから。」

今思えば恥ずかしい台詞を、15歳の本田君は真剣に言ってくれた。その言葉を15歳のあたしがどこまで本気で捉えていたのか分からない。

彼はあたしよりずっと大人で将来の事まで考えていたのに、あたしときたら彼氏ができて浮ついてるだけの、ただのバカ女だった。

彼との別れは唐突にやってきた。

冬休みが終わってから、彼が学校に来ることはなかったからだ。

彼の母親を追っていたDV男が戻ってきて復縁を迫ったが拒否され、仕返しに彼に暴行を加えたのだ。

1週間、監禁されたまま暴行を加えられた彼は瀕死の状態で見えられ、そのまま母親と一緒に県外の施設に保護されたらしい。

もちろん、その行方は誰にも明かされなかった。

暴行した男も逃走したまま、逮捕されずに終わった。

あたしがそれを知ったのは、彼が住んでいた市営団地に住んでいる子が噂しているのを偶然聞いたからだ。

あくまでそれは噂で、正しい情報はどこにもなかった。

中学生だったあたしには、彼を探すとか犯人を捕まえるとか、大それた事はとてもできなくて、突然いなくなった初めての彼氏を想って泣くしかなかった。

やがて卒業し、高校生活が始まったあたしは少しずつ彼の事を忘れていったのだ。

トラウマ 1

マクドナルドのカウンターの前でまさかの再会を果たしたあたし達は、お互い呆然と見つめあったまま固まっていた。

あたしの頭に中学時代の思い出が走馬灯のように駆け巡る。

すっかり忘れていたクセに、彼の顔を見た途端、公園で隠れてこっそりしたキスのことまで思い出すんだから人間って都合良くできるもんだ。

固まっているあたし達に、さっきの高校生バイトの女の子が言い難そうに声を掛ける。

「あの〜、フィレオフィッシュセットとテリヤキバーガーセット、店内でお召し上がりできてますけど？」

その声にあたし達は同時に我に返って、慌ててお互いのトレイを掴む。

すっかり成長してあたしを見下ろしている彼に、あたしはドギマギしながら小さな声を掛けた。

「・・・あの、良かったら一緒に食べない？」

その言葉に、彼は無言のまま嬉しそうにニッコリ笑った。

トレイを持って、あたし達は二階に上がった。

夜の9時を回った駅前のマクドナルドは、さすがに人が少なかった。

あたし達は人目につかないような奥まった窓際の二人用の席に向かった。

成長した彼は確かに長身で大柄なんだけど、相変わらずの痩せ型でロック歌手みたいな体型だ。

今だに「栄養不良児」なんだろうかと、ふと心配になる。

彼は黙ったまま、テーブルを挟んだあたしの正面に座った。

少し恥ずかしげなその笑顔は、確かにあの頃と変わらない『ボンビ一本田』だった。

あまりに突然の再会に、あたしは何から聞いて話していいのか分からず、取り合えずポテトを摘んで口に啜える。

「・・・久し振りだね。今までどこにいたの？」

おずおずと問いかけたあたしに、本田君は何か言いかけて口を半分開けたが、すぐに唇を噛み締めた。

作業着の胸ポケットからボールペンを取り出し、トレイに乗っていた広告の裏にサラサラ何か書き始める。

『大阪 このまちに戻ってからは2年 みゆきは元気だった？あえてうれしい』

書いたものを見せられて、あたしは思わず眉間に皺を寄せる。

「ねえ、何で喋らないの？聞こえてるんでしょ？これってかなり面倒くさいんだけど？」

少しぶっきらぼうに言ったあたしに、彼はひどく悲しそうな顔をした。

その顔は女の子みただった中学時代の面影が残ってて、優しそう

な目尻が下がったところなんかあの頃のままだ。
あたしが彼の顔を観察している間、彼は広告の裏に新たなるメッセージを書き始めた。

『オレはしゃべれない 声がでない 筆談でいい?』

それを見て、あたしは怪訝な顔をして彼の顔を改めて見つめる。

「何で声が出ないの? 中学校の時は普通に喋ってたじゃん? 喉の手術でもしたの?」

困った様に、彼は俯いてボールペンをクルクル回した。

これをすると言わんと浪人すると言わんとジंकスがあるペン回しが彼は昔から得意で、いつも無意識にやっていたのを思い出す。

ここにいる男性は確かに本田君に間違いはない。

頭を掻きながら、彼は再びボールペンで書き殴る。

『義父にころされかけてから声がでなくなった』

「はあっ!?! 殺されかけた?」

あたしは思わず、声を上げた。

照れてる場合じゃないだろうに、彼は恥ずかしそうに首を竦める。

「あの時……いなくなつてからDV男に暴行されたつてのは、本当だったの?」

黙って頷く彼。

あたしは驚愕の表情をしたまま硬直していた。

具体的に何をされたかは聞けないけど、声を失うほどの恐ろしい事

が起ったことは間違いない。

「・・・その後、どうしたの？」

『ケガがなおるまで半年くらい入院 それから母親と大阪にいった
一年おくれてむこうで4年夜間高校行って 2年前一人でかえっ
てきた』

器用にペンを回しながら、彼はサラサラと書き殴っていく。

同じ年の彼の壮絶人生に、あたしは呆気に取られて文字を見つめていた。

『みゆきは今なにしてる？OL？』

そう書いた紙を見せると、本田君はあたしの着ていた事務職の制服を指差した。

なるほど。

仕事帰りでそのままの格好だったから、これを見ればOLだと分かるだろう。

「当たたり。小さい会社で5年も給料計算やってる。もう辞めたいよ。つままないし給料少ないしさ。早く結婚したいくらい。」

思わず出たあたしの本音を聞いて彼は苦笑する。

そしてまた、サラサラと紙に台詞を書き綴っていく。

『彼氏いないの？』

「・・・言うと思った。結婚するような相手いませんよ。こんなつままない女、どうせ誰も相手にしてくれないって。」

嘘をついたつもりはなかった。

今夜、逢うことになっていたあの妻子持ちのイケメンは彼氏としてカウントしたくなかった。

彼にとつたら、あたしなんて所詮セフレだ。

そういう体だけの付き合いをしているあたしを本田君は軽蔑するに違いない。

あたしは優しくて正義感の強かった本田君に、今の汚れた自分を知られたくなかった。

何にも知らなかったあの頃のままのあたしを思い出して欲しかったのだ。

あたしの思惑も知らずに、無邪気な本田君は優しく笑って、またペンを走らせる。

『よかった オレ まだみゆきのこと好きだよ』

・・・相変らずの直球。

言われたこつちが赤面してしまう。

あたしはもう、そんな事を言っただけで貰えるような女の子じゃないのに、告白は嬉しかったけど、申し訳なかった。

携帯の出会い系サイトで見つけた金払いのいい男とばかり遊んでるって言ったら、前言撤回するに違いない。

真っ直ぐに見つめる彼の視線を逃れるように、あたしはハンバーガーにかぶり付いた。

トラウマ 2

マクドナルドの二階の窓から見える駅前の夜景は、風俗店のネオンだけが派手に光り輝いていてチープな事この上ない。

あたし達はそのシケた夜景を眺めながら、お互い無言でハンバーガーを食べ続けた。

彼が喋らないのは仕方がないとして、日頃お喋りなあたしが無言でいられるのは自分でも驚きだった。

思えば彼と付き合ったのはたった4ヶ月だ。

その4ヶ月の間、あたし達は一緒にいてもお互い黙っていることが多かった。

あの頃、その沈黙が寧ろ心地良かった。

サイトで知り合った男性を前にすると、あたしは素の状態よりテンションが上がって喋り続けてしまう。

それは相手を喜ばそうと無意識にやっているあたしのパフォーマンスの一つだった。

喋っていないと飽きられる。

つまらない女だってバレてしまう。

そんな脅迫観念から、あたしのテンションは常に高かった。

だから一緒にいるだけで落ち着くなんて関係は今までになかったのだ。

今、目の前で黙ってハンバーガーを食べている本田君にパフォーマンスは無用だつて分かっている。

中学時代のあたしを知ってる彼に見せかけのハイテンションは通用しないし、そんな事をしなくても彼はあたしを見てくれる。

そんな安心感をあの頃と変わらない彼の笑顔に感じていた。

10時の閉店を知らせに高校生バイトが二階に上がって来た時、あたし達は紙屑ばかりになったトレイをダストボックスに持っていきながら店を出た。

外に出た途端、真冬のような冷たい風が肌に刺さって、あたしは思わず身を竦める。

隣接する店舗のシャッターの前に黒いスクーターが留めてあるのを彼は黙って指差した。

「何？あれ本田君のスクーター？」

質問してやると、彼は自分を指差し頷いた。

キーを作業着のポケットから出すとそれをあたしに見せて、バイバイと言うように手を横に振った。

「えっ！何？もう帰るってこと！？久し振りに会ったのに！？」

さつき、あたしの事まだ好きだって言っただばかりなのに。

ご飯食べたらいバイって、中学生じゃないんだから。

あたしは驚きを通り越して、半ば憤慨して抗議した。

「何で？連絡先も聞いてくれないの？もう会うつもり無いつて事？

このままバイバイでもう会えなくてもいいってことなの？」

矢継ぎ早に詰問するあたしを見下ろして、彼は困った顔で唇を噛む。口を開いて何かを話そうとはするのだが、出るのは溜息のような息の音だけだった。

本当に声が出ないのを見ただけで分かった。

でも、それとこれとは話が違う。

「あたしと会えて嬉しかったんでしょ？ だったらもつと一緒にいてよ。まだあたし話してないこと一杯あるんだから。今からどっか他の店行ってもいいし、今日がダメなら他の日に会うとか・・・てか、携帯くらい教えてよ。とにかくこれでバイバイなんて認めないから！」

あたしは鼻息荒く言い切った。

これは嘘偽りない言葉だった。

あたしはまだまだ彼と別れたくなかったし、このまま二度と会えなくなるのは絶対に嫌だった。

彼は目だけ上を向いて少し考えてから、さっきのボールペンを胸ポケットから出して自分の掌に何かを書きつける。

困ったような少し照れたような顔で、彼は手をあたしに向ける。

『ウチくる？』

開いて見せた掌の言葉に、あたしはやつと納得してコクンと頷いた。

パーキングから車を出して、あたしは前を走る本田君のスクーターの後をついて走った。

「ウチ」と言ったが、誰とどこに住んでいるか何も聞かないまま、あたしは彼の後を追っかけている。

喋れない事がこんなに不自由だとは思わなかった。

波乱万丈な彼の身の上を逐一紙に書いていたら、明日になっても終わらないだろう。

そのまま出版したら印税が入るか。

この街に戻って2年って言った。
どうしてすぐにあたしに会いに来てくれなかったんだろう。
2年間、どんな生活をしてたんだろう。

前を走る彼の背中を眺めながら、あたしはアクセルを踏み続けた。

駅前の繁華街を抜けると静かな住宅街が広がっている。

田舎の駅前が栄えているのは半径1km以内だけだ。

真っ暗になった住宅街の細い道路をスクーターは縫っていく。

やがて、彼のスクーターは2階建ての小さな白いマンションの前で
停まった。

入居者募集の立て看板に書いてある不動産会社の名前を見て、ここ
が敷金礼金0のマンスリーマンションだと分かった。

僅かばかりのスペースの自転車置き場にスクーターを突っ込むと、
本田君はあたしの車に向かって駆け寄ってきた。

窓から車を指差し、その後マンションの裏手を指差す。

裏側には歩道を挟んで川があるらしく、ガードレールの前には違法
駐車車がズラリと並んでいるのが見えた。

そこに停めると言うことか。

案外、ジエスチャードで何とか通じるもんだ。

あたしは妙なところで感心しながら車を移動させた。

彼の部屋は201号室。

つまり角部屋だ。

薄暗い電灯がついたコンクリートの廊下をあたしは本田君の後につ
いて歩いた。

彼は作業着のズボンのポケットからチェーンでベルトに繋がってい
るキーケースを引っ張り出した。

慣れた手つきで鍵を開けると、ドアを開いて、後ろにくっついて
あたしに手招きする。

「あ、お邪魔します。」

恐縮しながら、あたしはドアを支えている彼の前を通って中に入っ
た。

トラウマ 3

玄関入ると右手に小さなキッチン、反対側がユニットバス。中は6畳くらいの一部屋だけで、シングルベッドがその半分を占拠している。

カーテンのかかった開き戸の向こうは小さなベランダで、そこからマンションの裏を流れる川が見えた。

ハンガーにかかった作業着が2枚くらいとTシャツがカーテンレールに引っ掛かっている。

殺風景な男の子の部屋という印象だった。

フローリングの床に座り込むのも変な感じだったので、あたしはベツドの縁に少しだけお尻を乗せて座った。

彼は黙ったまま、キッチンに立ってお湯を沸かしている。

お茶でも出してくれるんだろう。

ヤカンを見つめる彼の横顔を眺めながら、あたしは自分がやっと若い男の子の部屋に押しかけてしまった事に気が付いた。

・・・ふしだらな女の子だと思っただけかな。

まさか平成のこの時代にそんな固いコト言う人はいないだろう。

あたし達、8年ぶりだと言っても知らない間柄じゃないんだから。

そりゃ、キスマでだったけどさ。

気が付かない内にブツブツと独り言を言ってたあたしの前に、突然ヌツとコーヒーカップが差し出された。

顔を上げると至近距離に本田君の顔がある。

「うっわあー！」

びつくりしたあたしはベッドに仰け反りながら後ずさった。
声を出さずに笑顔を作りながら、彼はあたしの隣に座ってもう一度
カップを差し出す。
インスタントの粉にクリープが入っているコーヒーだって、あたし
にもすぐ分かった。
まるで学生の一人暮らしだ。

「ありがとお……。」

彼からカップを受け取って口にするのと濃厚な甘さが広がった。
冬並みの冷気で冷えた体に熱いインスタントコーヒーは五臓六腑に
染み渡った。

肩が触れ合いそうなくらい隣に座ってる本田君を感じて、あたしの
胸は勝手にドキドキし始める。

8年ぶりに会ったばかりなのに。
何期待してんだ、あたし！

カップに口を付けながら、あたしは上目でこっそり本田君の横顔を
観察した。

中学校の時はまだ女の子みたいだった綺麗な顔が、シャープなライ
ンを残したまま男らしくなっている。
端正な横顔だけど、相変らずの青白い顔色に黒い髪がかかっている
のが病的な印象だ。

この部屋で一人で住んでいるんだろうか。
ご飯はちゃんと食べてるのかな。

「……本田君、ここで一人暮らし？何の仕事してるの？」

あたしの問いかけに、彼は口を開いてから、思い出したように照れ笑いを見せた。

自分でも時々、声が出ないことを忘れているみたいだ。

ジェスチャーで返事をするにはハードルが高い質問だった。

玄関のドアの郵便受けから出張エステやらエロビデオ配達やらのチラシを引っ張り出して来て、その裏面に返事を書き始める。

『一人暮らし　ここは派遣会社の寮　自動車部品工場の請負　期間工だよ』

「ちやんとご飯食べてるの？自炊してるの？」

『しない　弁当ばっか』

「ダメじゃん。だからそんなに細いんだよ。」

『これは生まれつき　オレは太らない』

彼はペンをクルクル回しながら、可笑しそうに笑った。

尤も、それは顔の表情だけで、笑い声は出てこなかった。

その代わりに喉の奥から吐息のような呼吸が聞こえた。

「・・・ねえ、もう声出ないの？一生治らないの？」

声のない彼の笑顔を見ているのが辛くて、あたしは思わずその質問をした。

彼は少し目を伏せて考えた後、再びペンを走らせる。

『わからない　心因性のモノだから　首しめられてころされかけたのがトラウマになってる　時々息ができなくなる』

それを聞いて、あたしは背筋が寒くなった。

そして、あの時の噂を思い出す。

一週間、DV男の暴行され続けた15歳の本田君は声を失うほどの恐怖と苦痛を味わったに違いない。誰にも助けてもらえなくて、きつと絶望で声が枯れるまで泣き叫び続けたんだろう。

彼の書いた後のチラシがどんどん増えてベッドに散らばっていく。あたしはそつと彼に体を寄せた。

二人の肩が触れ合ったけど、彼は動かなかった。どうやら嫌がっていない事を確認してから、あたしはその端正な顔を両手で包み込む。

目を伏せたまま本田君は抵抗もせず、されるがままになっていた。あたしは顔を近づけて、唇にそつとキスをした。

乾いた彼の唇は冷たくて固くて、そして、あたしを受け入れようとはしなかった。

「……どうして？嫌だった？あたしの事、軽蔑した？」

マネキンに口付けたみたいが無意味なキスにあたしは悲しくなった。彼は申し訳なさそうに、首を横に振る。

そして、再びペンを手に取って、メモを書き始めた。

『オレできないんだ 期待にそえなくてごめん』

目の前に差し出されたメモを見て、あたしは愕然とした。

依存 1

彼はペンを回しながら、申し訳なさそうな顔で頂垂れた。

『期待に沿えない』という真意をはかりかねて、あたしは彼に詰め寄る。

「・・・それ、どういう意味？できないって、それもトラウマ？それとも、あたしとはソノ気にならないって事？」

『いいたくない とにかくできない ごめん』

再び広告にペンを走らせると、彼は悪霊退散のお札の如く、あたしに突きつけた。

・・・って、あたしは悪魔か！？

ム力ついたあたしは彼の手から広告を奪い取って、目の前でビリビリと破り捨てる。

「失礼ね！別にあたしだって、今更本田君と何かしようって思ってるわけじゃないんだから！もういい！帰る！」

勢い良くあたしはベッドから立ち上がった。

彼も慌てて立ち上がって、クルリと玄関に向かって背を向けたあたしの背中に追いつがる。

あたしの手がドアの取っ手に触れた時、彼の長い両腕があたしを背中から抱き止めた。

あたしの背中に、ピッタリくっ付いた彼の胸の温かさが伝わってくる。

抱き締める両腕に力を込めながら、彼はあたしの耳元に吐息のように囁いた。

「ゴ・・・メン・・・」

声にならない彼の息は、確かにそう言った。

頑張つて声を出そうとしてくれてるんだ。

彼の思いは痛いほど伝わってくる。

なのに、あたしは素直じゃなかった。

結果的にあたしからの誘いを断わられた形になった事に、プライドを傷付けられたからだ。

「・・・帰るよ。あたし達、会わなきゃ良かったね。」

その言葉に、彼の手からスッと力が抜けた。

首に巻きついていているその両腕を、あたしはそつと外す。

チラリと目だけ動かして後ろを見ると、悲しそうな顔で彼は腕を下ろしていくところだった。

腕が完全にダラリと降ろされた時、あたしはドアを開けて、木枯らしが吹き荒れる外気の中に飛び出した。

翌日。

聞き慣れた携帯の着信音であたしは目を覚ました。

ピンクの遮光カーテンの隙間から差し込む明るい日差しが、ちょうど、あたしの目の上に直撃している。

本田君のアパートから飛び出してから、結局、あたしは自宅に戻ってきて自分のベッドで不貞寝してしまっただ。

昨日の出来事が少しづつ、頭の中で再形成されていく。

その間も携帯の着信音は鳴りつ放しで、目を閉じたまま、あたしの手は無意識に携帯を探してベッドの中を這い回った。

やがて枕の後ろに放置されていたストラップが手に触れ、あたしはそれを手繰り寄せて着信ボタンを押した。

「もしもし？ミユちゃん？俺。昨日はごめん。まさか、突然、戻ってくるとは思わなかったから。」

あー・・・聞き覚えのあるこの声・・・。

誰だったっけ？

昨日までメチャクチャ好きだった声の持ち主は本田君との一件によつて、あたしの脳裏からキレイサツパリ削除されていた。

「・・・ノブリン？どーしたの？朝早いじゃん？」

「もう遅っせーよ。今11時だぞ？昨日はお前こそ他の男と遊んでたんじゃないのか？」

携帯の向こうから、朝型人間ノブリンの甲高い笑い声が聞こえた。

ノブリンというのは、会う筈だった妻子持ちの三十路のイケメンの事だ。

本名が河合信彦だから「ノブリン」

今となってはどーでもいいけど。

「・・・ノブリンにカンケーないし。約束すっぱかしといて、今更、何か用？」

「嫁が子供連れてまた実家に帰ったんだ。今度こそしばらく帰って来ないから、今から来いよ。」

「・・・めんどくさ・・・。いいよ、もう。気が乗らないもん。」

「怒るなよ。埋め合わせするからさ。いつもの場所で待ってる。車で向かえに行くよ。」

「・・・ご飯はイタリアンがいい・・・。」

「じゃ一時間後、いつもの場所で。いい？」

こうなると、もう抗えない。

あたしは観念して彼の誘いに乗る事にした。

彼が言ういつもの場所というのは、あたしの自宅から徒歩15分程にある小さな公園の駐車場の事だ。

妻子持ちのノブリンのマンションの近くであたしを車に乗せる訳にはいかなかったし、自宅前まで迎えに来て貰うこともできなかった。でも、いつもそこで待ち合やす事にしていた。

夜になると全く人気がない公園の駐車場なら、車内で済ます事もできる。

何かにつけて便利な場所だった。

昨日は化粧さえ落とさずに寝入ってしまったので、あたしはノロノロとベッドから這い出してシャワーを浴びた。

そして彼好みの服をチョイスする。

この寒いのに肩が出た黒のシャツとショートパンツ。

ロングブーツに足を捻じ込み、レザーのショート丈のジャケットを羽織る。

お化粧はバシバシの付け睫毛でアイラインを強調。

濡れたような唇にする為、ベタベタのグロスを塗りたくる。

ノブリン好みのバカ女の完成だ。

あたしは玄関の鏡で全身チェックしてから家を出た。

『オレはできない 期待に沿えない いいたくない とにかくできない』

公園に続く歩道を歩きながら、あたしは昨日の彼が書いたメッセージを頭の中でパズルみたいに組み立てていた。

あたしが嫌なんじゃなくて、もしかしたら本当に精神的な問題の為にできないって意味だったんだろうか。

だとしたら、あんな風に飛び出してきたのは申し訳なかったと思う。でも、その結果、もう会う事がなくなれば、それはやっぱり良い事になるだろう。

彼がセックス恐怖症だとしたら、あたしはセックス依存症だからだ。相反し過ぎて、あたし達が付き合うのはもう無理だ。

付き合ってたあの頃は、まだ二人とも健全な中学生だった。

自分達が将来こんな大人になるなんて想像もしなかったのに・・・どこであたし達は迷子になっちゃったんだろう。

あたしは一人で自嘲しながら、彼の待つ公園に向かって足を速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427y/>

ロスト・チルドレン

2011年11月8日02時02分発行